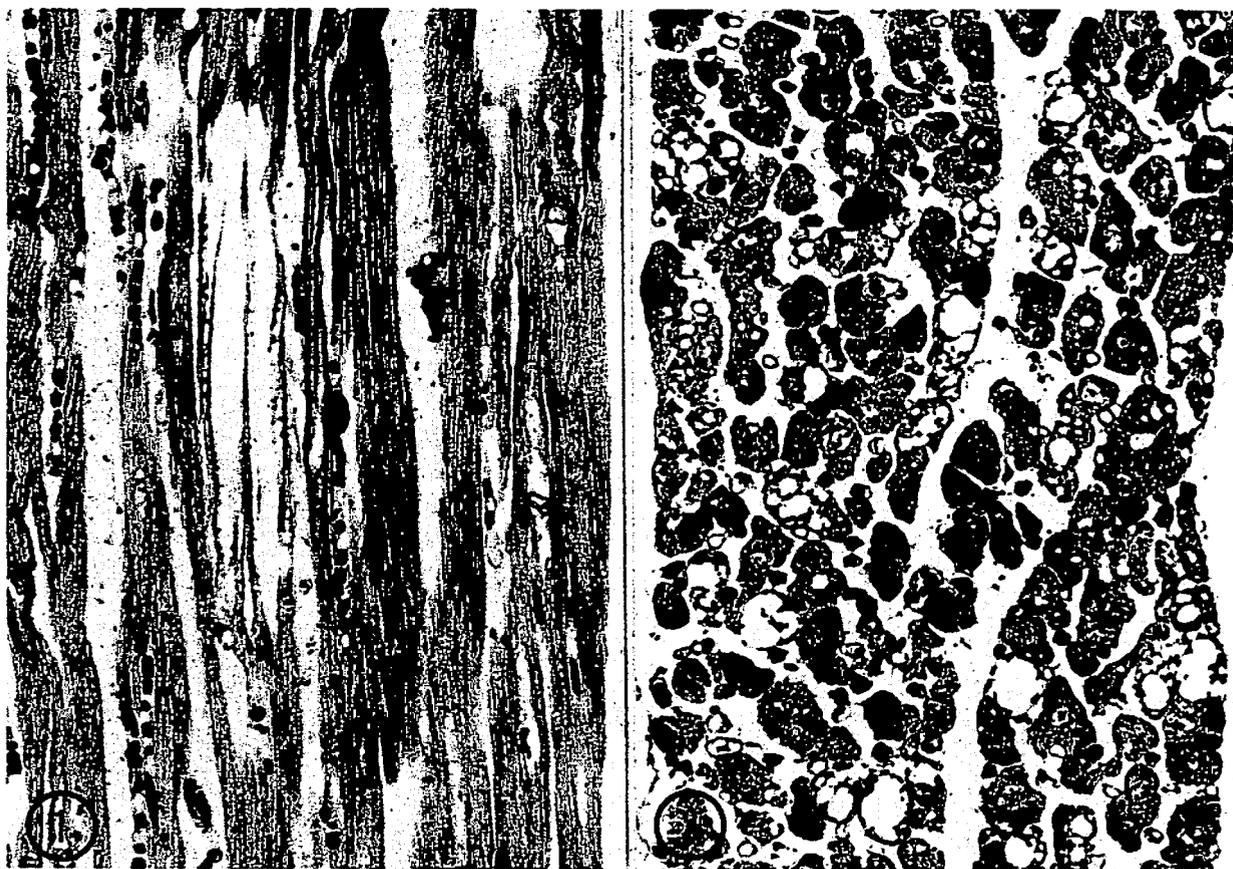


イヌの心臓と小腸

北海道大学比較病理学教室出題 第28回獣医病理学研修会提出標本No.491



動物：イヌ，ペキニーズ，雌，7才。

臨床事項：「数日前より咳嗽があり，これは昨日よりとくに激しくなった」との稟告で来院した。初診時努力性呼吸を行い，心音は雑音のため聴取困難であった。強心剤を投与したが，4時間後容体急変して死亡した。なお，本犬には鶏肉，豚肉を主とする飼料が長年にわたって与えられていた。

肉眼所見：心膜水が中等度に増量し，両心室，とくに左室が著明に拡張し，左室壁と右室壁の厚さはほぼ同一（約5mm）であった。心尖近くの左室筋内膜直下に米粒大壊死巣1ヶがあった。心臓以外の変化としては，慢性うっ血肝，左肺後葉に主座するうっ血水腫，小腸筋層の褐色化（brown gut）が所見された。

組織所見：心臓では，場所を選ばず全域の心筋に，間質の水腫性疎開，心筋線維内のリポフスチン沈着ならびに多発性空胞形成が認められた。空胞は大型で筋線維の広域を占居したり，1本の筋線維に小空胞が多発して網目状を呈したり，様々であった（図1，HE，×390；図2，アザン，×390）。これらの空胞は脂肪染色陰性で，電顕的には膜構造に囲まれ，細胞内膜系の拡張，癒合によっ

て形成されたものであった。以上のほか，心筋線維には顆粒変性，極めてまれに硝子化が認められた。

小腸の筋層では，シュモール反応陽性のリポフスチンが，平滑筋線維ならびに散在するマクロファージに沈着していた。これと同一の変化は胃壁の筋層にも認められた。また，舌の筋，骨格筋などに顆粒変性，空胞形成，リポフスチン沈着が認められた。さらに，脳・脊髄の神経細胞にもリポフスチンがしばしば沈着していた。

考察と診断：本例を「全身性リポフスチン沈着症犬における特発性拡張型心筋症」と診断した。この型の心筋症の組織病変には特異性はないと言われているが，心筋線維の空胞形成は良く所見されている。

本例の褐色腸をはじめとする全身性リポフスチン沈着症は，ビタミンE欠乏症の特徴病変である。本欠乏症と心筋症との関係は不明である。次に，ドーベルマンなど大型犬には，本例と類似の所見を示す家族性拡張型心筋症の発生することが良く知られている。本例が家族性に生じたか否かの決定はなされないが，小型犬であることには注目したい。